



第2回研究会 2016年7月16日

みなさまのご協力おかげで、第2回の研究会を開催することができました。3連休の初日で、しかも天気も良くない中、7名の先生が集まりました。大学の教員や指導主事の先生、中学校の先生まで幅広いバックグラウンドの参加者がありました。遠慮せずに、なんでも言い合える研究会を目指していますが、今回も参加した皆さんからたくさんの質問や意見が出る活発な研究会となりました。

授業者は、弘前大学教育学部附属小学校の吉谷瑞穂先生です。7月22日に公開研があり、それに向けて自分の授業を公開してくださった、非常に熱心な先生です。授業展開ごとに、ビデオを止めて、参加者から意見や疑問点を挙げてもらい協議するという形をとっています。以降、そこで挙げられた意見をまとめていきます。

対象：弘前大学教育学部附属小学校6年

授業者：吉谷瑞穂先生

テーマ：月と行事

題材名：When is your birthday?

ねらい：月の言い方に慣れ親しみ、進んで話したり聞いたりしよう

1. 授業を行う上で気を付けていること

- ▶ 母語をもとにして授業を行うこと
- ▶ どうアウトプットさせるかを工夫して、授業をしている。どれだけインプットをしてもなかなかそれがアウトプットにつながっていかない。
- ▶ 言わせるのではなく、子どもが主体的にアウトプットする手立て。このことが公開研のテーマである Active Learning につながるのではないかと考えている。
- ▶ 子どもの中にある英語をどう活用するか、どう引き出していくのかを工夫して普段から授業をしている。
- ▶ あまり先生から「おろす」のではなく、子どもから英語を出せたい。そのためにはどうすればよいのかを考えている。

2. あいさつからウォームアップ

(1) あいさつをして、今日のトピックを紹介する (好きな教科・好きな給食のメニュー・好きな飲み物)

(2) 児童は3人でペアになり、What ○○ do you like? で質問する。

1. (授業者から) 昨年、対話をいかに活発にするにはどうすればよいのかを研究していました。一般的な4人のグループだとどうしても何も話さず聞いているだけの「お客さん」が出てしまう。3人であれば次に必ず話を振られるので、言わなくてもいいということがなくなる。また、1人目に What ○○ do you like? で質問したら、もう一人には How about you? と表現を変えたり、答えが同じであっ



た時には Me, too.というリアクションをするなど自然なコミュニケーションの育成にもつながっている。

(参加者から) (以下、◇質問・コメント、→それに対する返答)

- ◇ 最初に始める人を誰にするという指定はあるのか?
→まったくしていない。誰から始めてもいいことになっている。
- ◇ 活動時間が長すぎないか?
→余裕をもって話をさせるようにしている。そうすることによって、What ○○ do you like?と聞いた後に、Why? (なぜ) と聞くこどももいる。
- ◇ 答える場合は日本でもいいのか?
→なんとか知っている英語でやり取りさせるようにしている。知っているけど出せなかった自分の中にある英語をなんとか引き出そうとする。
- ◇ Hi Friends だと、What do you like?というのは扱うが、what の後に名詞が来る What ○○ do you like?の形はいつの段階で導入しているのか?
→1年生から英語には触れていて、必ずしも Hi Friends と同じ流れでカリキュラムを組んでいない。What ○○ do you like?の形は、初出は3年生。ただし、表現としては2年で導入しても、理解できる子供たちだと思う。
What ○○ do you like?は知っていればいろいろな場面で使えるいい表現だし、教えてもすぐにできるようになるとは限らない。だから時間をかけて、いろいろな場面で使い積み重ねていくことが大切だと思う。
- ◇ 時間が長くて、終わった子供が遊んでしまっている。私であれば、まず「subject」と一つテーマを出して、大体が終わるか終わらないかくらいのタイミングで、次のお題「給食のメニュー」を出すというような形でどんだんかぶせていく。ウォームアップでは、全員が終わるのを待つ必要はないのではないか。
- ◇ 教師によるインプットがないように思う。まずは、教師が「好きな教科」など今日のトピックについて語り、こどもがイメージを膨らませる。そのあとにアウトプットさせるというのが基本となると思う。その際に黒板に好きな教科や給食のメニューなどの絵が提示してあれば、子供が何を話せばいいのかわからないということはないと思う。
- ◇ 教師によるデモンストレーションが必要である。もちろんインプットという意味もあるが、その中で子どもたちは、自分が何を言おうか考える準備の時間になると思う。

3. Today's Topic から Communication

- (1)今日のめあての確認「月の言い方を使って、話したり聞いたりしよう」
- (2)月の名前を確認し、それぞれの月の特徴的な行事(1月なら New Year's Day)を考える。
- (3)日本独特の行事や、特に行事がない月について、「ことば天」を作る。
- (4)3人グループでの話し合い→9人グループでの話し合い→個人発表の流れで授業が進められる。



2. (授業者から)「ことば天」とは「国語辞典」のようなもの。天が辞典の「典」ではないのは、きちんと意図がある。子どもたちは、1語にこだわりすぎて、それが言えないと、詰まってしまうことが多い。でも、言葉が出てこなくても2語3語とくっつけば何とかなることが多い。だから天ぷらの衣のように、2つ3つ言葉をつなげて表現させるようにしたいという思いが詰まった言葉である。

(参加者から)

- ◇ 1月から12月まで言えるようだが、いつから指導をしているのか？
→低学年で歌として導入する。その後、中学年でも歌や活動を通して触れさせている。「月の名前を覚えるからね！」と明示的にやるのではなく、歌を通して自然に身につけるようにしている。
- ◇ 教師の範読や、CDを活用するなど「モデル」がなくなんとなく活動に入っているように見えるが、何か意図はあるのか？
→できれば「Repeat after me.」は言わないようにしている。オウム返しになってしまって、何も考えずに口から出して言った気になってしまうことを防ぐためである。だから、間違ってもいいからまずは子どもから言わせたいと考えている。オウム返しではActive Learningにならないのではないかと。例えば、5月であればトトロのメイ、4月であればエイプリルフールなど、子どもが知っていることは結構あるものである。
- ◇ 1年生は週何時間英語をやっているのか？
→全学年週35時間やっている。
- ◇ メリハリという意味でも、教師がモデルを示すことは必要かもしれない。
- ◇ 指導するためには、まずその前提となること、今回であれば1月から12月まで言えることをしっかり確認していなければいけないと思う。全員でなんとなく言えていても、中にはうまく言えずに困っている子どもがいるかもしれない。
- ◇ 1年生からずっと手を変え品を変えやって今に至っているのだから、リピートという形でなく工夫して子どもに言わせたいという、吉谷先生の気持ちはわかる。子どもから出させるのであれば、誕生日を聞いて、その月のカードを貼っていくという工夫がとってもいい。
- ◇ 英語の質問には3段階あって、Yes/No、A or B、WH、それぞれを少しずつ段階的に聞くといいと思う。Is this in January? No. Is this in February? No. Is this in March? Yes. のようにすれば子供に対するハードルも下がるし、月の名前をインプットする保障にもなる。
- ◇ 小学校の先生には、なじまないかもしれないが、こういうしつこさも大事ですね。
- ◇ 「学習」を考えたときに、「武器」=使える表現をどう与えるか？中学校であればウォームアップや導入で子どもたちに言わせる仕掛けをする。Active Learning を考えるときには、とくにここをしっかりと考えて、しかけを仕組んでおかないと子どもたちは何もできないのではないかと。
- ◇ 「子どもはもうわかっている」という前提であれば、音の確認などをしてはどうか？Februaryなどはしっかり発音しようとする結構難しいものである。+アルファの活動になるかもしれないが、子どもにとってあやふやな部分を取り除いてあげることは大切ではないだろうか？
- ◇ 月の提示方法や行事の紹介の部分はワークシートを使ったり、グループでピクチャーカードを並べ



たり工夫が考えられそうです。

(授業者から)

こどもの英語の「正しさ」をどうするのかという問題があります。子どもは知っている英語を次週に出しているが、文になっていないし、語順もおかしい箇所があります。「正しさ」を保証するにはもう2段階3段階の工夫が必要だと思います。机間指導では、子どもたちに既習の箇所を示したりして、英語を引き出しています。Hi Friends やファイルなどが手元にあるので、それを活用しています。

生徒から、inside や outside という単語が出ているが、これは、4年生の時に折り紙をやっている、山折、谷折りで使ったものがここでリサイクルされている。部活でも in や out は使っていると思うので、それを活用しているのではないかと思う。

(参加者から)

- ◇ 普段のやり取りでは、正しい英語でなくてはだめというスタンスではだめで、たくさん出して間違っても平気だよという雰囲気が大事だと思う。だから、今日の授業のねらいである「月の言い方に慣れ親しみ、進んで話したり聞いたりしようとする」という評価は高くつくのではないかと思います。正しさが最初にあると、生徒はへこんでしまい、英語を出せなくなってしまうので、まず「たくさん出させる」ことを大事にして子どもを育ててほしいと思う。
- ◇ 正確さについては、教えるタイミングが大事だと思う。授業の後に個別で指導してもよい。まず、英語として自分の中に持っているものがたくさんあって、それに気が付くことで語彙の蓄積が進むのではないだろうか？
- ◇ 附属ならではの授業であり、なかなか一般校では難しいと感じた。衣をつけるように自由な発想で英語を出す「ことば天」は「楽しさ」と「危険」の表裏一体だと考える。というのは、連想ゲーム様な活動なので、1人1人の子どもを見たときには、中にはできていない子供もいるのではないかとグループとして共有はできても連想できていない子どもがいるのではないかと考える。ちょっと丁寧過ぎても、手持ちのカードを増やすように指導してはどうだろうか？例えば、
The moon viewing party や the entrance ceremony のように最後にどういう言葉が来ているのか？語順というか、英語の特徴や日本語の違いなどそういう部分の気づきが、「外国として」慣れ親しむことにつながるのではないかと思う。
- ◇ 小中連携が重要視される今、中学校の指導案にも小学校の既習事項のとの関連について記載する箇所がある。例えば今日の授業の内容は、中学校3年生で行事を紹介する活動をする箇所につながるものである。だから、小学校の授業を見ることはとても大切だと思う。正確さという点については、やはり、input と output を繰り返すしかない。例えば、今日の授業で出されたものをALTに伝えてみて、本当に通じるかどうか試すという方法もある。そして通じなかった時には、どうするのか考えるのは子どもにとって非常に有効な活動になるのではないかと？
- ◇ 今日の活動は英英辞典を引くようなものであった。ただ、その表現が「正しい」のか知りたいのであれば、ALTに聞いたり「辞書」を引くだけでよい。ただ、今回の授業はその前にまず自分でやって



やってみる。ことに意味があると思う。そのあと正確さを求めたいのであれば、最後に辞書を引くようにすれば、授業者の先生のねらう形になるのではないか？

(丹藤先生から)

今回の授業には「ルール」がなかった。ルールというのは「形容詞」＋「名詞」のような単語の並びなどのことである。「ボキャブラリーをいっぱい出してみよう」という活動ならいいのかもしれないが、行事を「定義」という活動としては意味がなかった。

ではどうすればよかったかという、いっぱい出させたいで「精査する」ことが必要であった。子どもが出した英語の中で「使えるもの」と「ダメなもの」を分ける。全部か使えるわけではない。ALTに判断してもらうことも一つの手段であろう。こういう形にしないと、子どもにとって何が正解か？「ゴール」がないことになってしまう。実際に子どもから出された英語のほとんどは行事の定義としては受け入れられないものばかりである。もちろん小学校段階で「教えるもの」と「教えなくてよいもの」の判断は必要である。例えば only は小学校ではいらない。しかし、子どもからたくさん英語が出てきたときに、精査することは必要である。全部を拾う必要はなく、なんでもいいというわけではない。

間違いによってことばを覚えるのは事実であるが、そのためには正しい修正した input が必要である。つまり、間違っただけでどうケアするのか、教える側として考える必要がある。例えば、can を扱ったときに、I can swimming. や I can tennis. などという誤りは、事前に予想できるものである。こういう英文を子どもが出した時にどうするか？どこまで修正するべきかを考えておく必要がある。レベルの高いことをやっているのに、どれを拾って、どれを切るかは難しいとは思いますが、やはり正確さは必要である。

「Englishes = 世界共通語となりつつ英語だから、ネイティブの話す英語だけがモデルというのではなく、それぞれの地域に応じた、それぞれの形があってよい。日本人は日本人の土壌にあった英語を使ってよい」という考え方があるがあるが、やはり、正確さは考慮する必要がある。

(その後丹藤先生から、教科化についての情報提供がありました)

- 現在拠点校で、様々な実験が行われています。
- 高学年は、教科化になり、「読む」「書く」は導入される可能性もあり、中学には、現在の活動が下りてくる。
- 高学年には、現在中学校で作成が進んでいる Can-do リストの発想も取り入れられる可能性もある。
- 国語科との連携やモジュール学習など様々な形が検討されている。
- Taro is chasing Jiro. と Jiro is chasing Taro. のように、「語順」によって誰が誰を追いかけているのか意味の違いが出てくる「ルール」も扱われる動きもある。
- ただ、モジュールとして15分に分けても、準備や後片付けなどに時間が必要で、15分すべてを授業に使えるわけではない。つまり、1回の授業では3分のロスでも、それが積み重なったときには、非常に大きなロスになるだろう。このように形としてはうまくいくように見えるが、やるとなるとなかなか難しいのが現状と言わざるを得ない。
- 現在は、次の指導要領の準備のために、データを急いで集めている。とのデータをもとに2020年に



は教科書がつかわれ、実際の教科としてスタートする。2018年には段階的に、その教科書に応じるものが出てくると考えられる。

お知らせ

授業ビデオを送っていただければ、授業内での日本語と英語の割合、指示、発問、賞賛などどのカテゴリーの発話が多いのか診断します。詳しくはメールにてお問い合わせください。

第2回の研究会お疲れ様でした。小学校外国語活動は、考えるべきことがたくさんあるというのが正直な感想です。小学校に「総合的な学習の時間」のひとつとして、国際理解教育が導入されてから、次は5・6年に外国語活動の導入、そして次は、5・6年は教科化、3・4年生に外国語活動の導入のように目まぐるしく状況が変わる中、小学校の先生方はそれにこたえるべく精一杯日々の授業をされていることにいつも感銘を受けています。私も前任校で教科外として音楽の授業を担当した経験がありますが、専門でない教科の指導の準備も授業も評価も本当に大変だった記憶がよみがえります。「これでいいのか?」「自分がやっていることは正しいのか?」常にそんな気持ちをもって授業をしていました。きっと小学校で外国語を担当されている先生も同じ不安をお持ちなのではないかと思います。そんな先生方が、この研究会に参加して、先生方と悩みを相談したり、授業を見て忌憚のない意見交換することで、少しでも授業改善のきっかけ見つけ出してくださればと願っています。(文責 佐藤)